TADOKU JUNIOR やさしい名作リーダー ★★★☆☆ ふつう 604語

# The Little Match Girl

## マッチ売りの少女

E. Louise Smythe（1904年の本） 原文そのまま 朗読：Sarah Jennings、Abby

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 大みそかの寒い夜、マッチ売りの女の子グレーチェンは、雪の中ではだしでマッチを売っていました。手をあたためようとマッチをすると、ふしぎなものが見えてきて……。

It was very cold. The snow fell and it was almost dark.

It was the last day of the year.

A little match girl was running in the street. Her name was Gretchen. She had no hat on.

Her feet were bare. When she left home, she had on some big slippers of her mama's. But they were so large that she lost them when she ran across the street.

Gretchen had a lot of matches in her old apron.

She had a little bunch in her hand.

But she could not sell her matches. No one would buy them.

Poor little Gretchen!

She was cold and hungry.

The snow fell on her curly hair. But she did not think about that.

She saw lights in the houses.

She smelled good things cooking.

She said to herself, "This is the last night of the year."

Gretchen got colder and colder.

She was afraid to go home. She knew her papa would whip her, if she did not take some money to him.

It was as cold at home as in the street. They were too poor to have a fire. They had to put rags in the windows to keep out the wind.

Gretchen did not even have a bed. She had to sleep on a pile of rags.

She sat down on a door step.



Her little hands were almost frozen.

She took a match and lighted it to warm her hands. The match looked like a little candle.

Gretchen thought she was sitting by a big stove. It was so bright.

She put the match near her feet, to warm them. Then the light went out. She did not think that she was by the stove any more.

Gretchen lighted another match.

Now she thought she could look into a room. In this room was a table.

A white cloth and pretty dishes were on the table. There was a roast turkey, too. It was cooked and ready to eat. The knife and fork were in his back. The turkey jumped from the dish and ran to the little girl.

The light went out and she was in the cold and dark again.

Christmas

Gretchen lighted another match. Then she thought she was sitting by a Christmas tree. Very many candles were on the tree. It was full of pretty things.

Gretchen put up her little hands. The light went out.

The lights on the Christmas tree went up, up--until she saw they were the stars.

Then she saw a star fall.

"Some one is dying," said little Gretchen.

Her grandma had been very good to the little girl. But she was dead.

The grandma had said, "When a star falls some one is going to God."

The little girl lighted another match. It made a big light.

Gretchen thought she saw her grandma. She never looked so pretty before. She looked so sweet and happy.

"O grandma," said the little girl, "take me. When the light goes out you will go away. The stove and the turkey and the Christmas tree all went away."

Then Gretchen lighted a bunch of matches. She wanted to keep her grandma with her. The matches made it very light.

The grandma took the little girl in her arms. They went up, up--where they would never be cold or hungry.

They were with God.

The next day came.

Some men found a little girl in the street. She was dead.

In her hand were the burned matches.

They said, "Poor little thing, she froze to death."

They did not know how happy she was in heaven.

とても寒い日でした。雪がふって、あたりはもうほとんど暗くなっていました。

その日は、一年のさいごの日でした。

小さなマッチ売りの女の子が、通りを走っていました。女の子の名前はグレーチェンといいました。ぼうしもかぶっていませんでした。

足ははだしでした。家を出るときは、お母さんの大きなスリッパをはいていました。でも、あまりに大きかったので、通りを走ってわたるときになくしてしまったのです。

グレーチェンは、古いエプロンにマッチをたくさん入れていました。

手にも、小さなマッチのたばを持っていました。

でも、マッチは売れませんでした。だれも買ってくれなかったのです。

かわいそうなグレーチェン！

寒くて、おなかがすいていました。

雪が、グレーチェンのくるくるしたかみの毛にふりかかりました。でも、グレーチェンはそんなことは気にしていませんでした。

家々には明かりが見えました。

おいしそうなごちそうをつくるにおいがしました。

グレーチェンはひとりごとを言いました。「今夜は、一年のさいごの夜なのね。」

グレーチェンは、どんどん寒くなっていきました。

家に帰るのがこわかったのです。お金を持って帰らなければ、お父さんにぶたれるとわかっていました。

家の中も、通りと同じくらい寒いのでした。とてもまずしくて、火をたくこともできなかったのです。風が入らないように、まどにぼろきれをつめなければなりませんでした。

グレーチェンには、ベッドさえありませんでした。ぼろきれの山の上でねなければならなかったのです。

グレーチェンは、家の戸口の石だんにすわりました。

小さな手は、もうこおりそうでした。

手をあたためようと、マッチを一本取り出して火をつけました。マッチは、小さなろうそくのように見えました。

グレーチェンは、大きなストーブのそばにすわっているような気がしました。とても明るかったのです。

足をあたためようと、マッチを足のそばに近づけました。すると、火が消えてしまいました。ストーブのそばにいるような気持ちは、もうしなくなりました。

グレーチェンは、もう一本マッチをすりました。

今度は、ある部屋の中がのぞけるような気がしました。その部屋にはテーブルがありました。

テーブルには白いテーブルかけがかかり、きれいなお皿がならんでいました。シチメンチョウの丸やきもありました。すっかりやけていて、すぐに食べられるようになっていました。せなかには、ナイフとフォークがささっていました。シチメンチョウはお皿からとびおりて、女の子のほうへ走ってきました。

火が消えると、グレーチェンはまた寒くて暗いところにいました。

クリスマス

グレーチェンは、もう一本マッチをすりました。すると、クリスマスツリーのそばにすわっているような気がしました。ツリーには、たくさんのろうそくがともっていました。きれいなものが、いっぱいかざってありました。

グレーチェンは、小さな手をのばしました。火が消えました。

クリスマスツリーの明かりは、上へ、上へとのぼっていき――やがて、それが星だとわかりました。

そのとき、星がひとつ流れ落ちるのが見えました。

「だれかがなくなるのね。」とグレーチェンは言いました。

おばあちゃんは、この女の子をとてもかわいがってくれました。でも、もうなくなっていました。

おばあちゃんは「星が流れると、だれかが神さまのところへ行くんだよ。」と言っていたのです。

女の子は、もう一本マッチをすりました。大きな明かりがともりました。

グレーチェンは、おばあちゃんが見えたような気がしました。おばあちゃんは、今までにないほどきれいでした。とてもやさしそうで、幸せそうでした。

「ああ、おばあちゃん、」と女の子は言いました。「わたしもつれていって。火が消えたら、おばあちゃんも行ってしまうんでしょう。ストーブも、シチメンチョウも、クリスマスツリーも、みんな消えてしまったもの。」

そこでグレーチェンは、マッチのたばにいっぺんに火をつけました。おばあちゃんに、そばにいてほしかったのです。マッチの火で、あたりはとても明るくなりました。

おばあちゃんは、女の子をうでにだきあげました。二人は上へ、上へとのぼっていきました――もう寒くもなく、おなかもすかないところへ。

二人は神さまのところにいたのです。

次の日になりました。

何人かの男の人が、通りで小さな女の子を見つけました。女の子は、もう息をしていませんでした。

その手には、もえつきたマッチがにぎられていました。

人々は言いました。「かわいそうに、寒さでこごえてしまったんだね。」

女の子が天国でどんなに幸せか、その人たちは知らなかったのです。

## たんご と クイズ マッチ売りの少女

| | | |
|---|---|---|
| snow 雪 | slippers スリッパ | matches マッチ |
| apron エプロン | candle ろうそく | stove ストーブ |
| Christmas tree クリスマスツリー | star 星 | |

**Q1** グレーチェンがはだしだったのはなぜ？

① くつを売ってしまったから　② 大きなスリッパを通りでなくしたから　③ はだしが好きだったから

**Q2** 二本目のマッチをすったとき、見えたものは？

① シチメンチョウの丸やき　② 大きなストーブ　③ おばあちゃん

**Q3** グレーチェンが、マッチのたばにいっぺんに火をつけたのはなぜ？

① もっと寒くなったから　② マッチを売りきりたかったから

③ おばあちゃんにそばにいてほしかったから

**こたえ**

Q1 ② お母さんの大きなスリッパをはいて出かけましたが、大きすぎて、通りをわたるときになくしてしまったのです。

Q2 ① 二本目では、テーブルにシチメンチョウの丸やきがある部屋が見えました。ストーブは一本目、おばあちゃんはもっとあとです。

Q3 ③ 火が消えるとおばあちゃんも消えてしまうと思ったので、たくさんのマッチで明るくしたのです。

**原田英語の多読ベストジュニア**

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典** 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7841（E. Louise Smythe、1904年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1904 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Sarah Jennings、Abby（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。